



福永武彦「草の花」における男どうしの関係：硬派的稚児愛からプラトニックな友愛へ

その他のタイトル	The relationship between men in Fukunaga Takehiko's "Kusa no Hana" : From "Chigo ai" to platonic fraternity
著者	古川 誠
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	52
号	2
ページ	37-64
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00023105

福永武彦「草の花」における男どうしの関係

— 硬派的稚児愛からプラトニックな友愛へ —

古川 誠

The relationship between men in Fukunaga Takehiko's "Kusa no Hana"

— From "Chigo ai" to platonic fraternity —

Makoto FURUKAWA

Abstract

Fukunaga Takehiko's "Kusa no Hana" is a novel about the first high school students in the 1930s. This paper focuses on the relationship between men, their understandings of such relations, and the value systems behind their understandings in "Kusa no Hana." Furthermore, it clarifies the significance of these understandings and value systems in the transformation of the relationship between men in modern Japan. Shiomi Shigeshi, the protagonist in "Kusa no Hana," loves a younger student, Fujiki Shinobu. His is a self-contained love, spiritually uniting and uplifting, aiming for the eternal world of "idea". Some criticize his love because of its corporal aspect (i.e., physical desire) as well as its negative impact on the unity of a peer group. On the other hand, most students acknowledge Shiomi's love. One explains his homosexual love as a step toward heterosexual love, while others recognize it as "Chigo ai" (a man's love for boy) in the tradition of "Kou ha" in modern Japanese society. However, both understandings are different from Shiomi's idea of platonic love. "Kusa no Hana" contains various points of view on the relationship between men, and it shows the new model of this relationship. It is a compilation of the novels on male love in modern Japan.

Keywords: relationship between men, man's love for boys, culture of male love in "Kou ha", platonic fraternity, Fukunaga Takehiko, Kusa no Hana

抄 録

福永武彦の「草の花」は、1930年代の第一高等学校の学生たちを主人公とする小説である。この論文は、その「草の花」で描かれた、男どうしの関係と、それをめぐる登場人物のさまざまな認識、およびその背後にある価値観を分析することが目的である。さらに、そうした認識や価値観が、近代日本における男どうしの関係の変容において、どのような意味をもっているのかを明らかにする。主人公の汐見茂思の下級生藤木忍に対する愛は、永遠のアイデアの世界をめざす、精神的な一致と高揚をとまなう自己完結的な思いというものであった。それに対し、男どうしの愛=肉体的な欲望への批判や、下級生への執着が同学年集団の結束へ悪影響をもたらすという批判があった。しかし、周囲の大多数はそうした汐見の藤木への愛を許容していた。それは、同性への愛を異性愛へいたる一つの段階とみる見方と、前近代からの硬派的稚児愛文化の延長線上として汐見の愛を理解するものである。しかし、周囲の理解の仕方は汐見のプラトニックな愛の理論とは異なる視点からの理解であった。このような、男どうしの関係をめぐる多様な視点を含んでいることと、伝統的な硬派的稚児愛とは異なる新たな男どうしの関係を主題としたという意味で、「草の花」は、近代日本の少年愛小説の系譜の集大成と位置づけることができる。

キーワード：男どうしの関係、少年愛、硬派的男色文化、プラトニックな友愛、福永武彦、草の花

1. はじめに

性の問題を考察するにあたっては、さまざまなアプローチがある。

この論考では、1930年代の第一高等学校の学生たちを主人公とする小説を詳細に読み解くことによって、そこに表現された「男どうしの関係」をめぐるさまざまな立場や思想をあきらかにしていきたい。

そのことによって、近代の日本に存在していた硬派的な少年愛文化の変容をたどることが、この論考の目的である。

2. 問題の所在と論文の構成

近代の日本において、同性愛の問題と学校文化、学生文化とは密接な結びつきがあった。

とりわけ、明治期から昭和戦前期にかけての、男子学生間における同性愛は、「美少年騒ぎ」と呼ばれる社会現象として、広く人々に知られるものであった。学生間には、いわば同性愛文化、とでも言うべきものが存在していたのである。

そうした同性愛文化は、坪内逍遙の『当世書生気質』や森鷗外の『キタ・セクスアリス』での書生たちのように、文学作品の中でもしばしば取り上げられてきた。少年愛をめぐる文学作品の系譜としてそういった作品をとらえることができる。

この論考では、そうした少年愛文学の系譜につらなっている、福永武彦の小説「草の花」(1954)をとりあげ、そこに描かれた男どうしの関係をめぐるさまざまな思想やその背後にある価値観等について明らかにするとともに、「草の花」がそうした少年愛小説の系譜においてもっている意味について考察していく。

以下の考察では、まず福永武彦と「草の花」について概観したあと、「草の花」の前半部分にあたる「第1の手帳」の章に焦点をあてて、主人公である汐見茂思の男どうしの関係に対する認識と行動を詳しく紹介する。つぎに、その汐見の考えや行動に対する、周囲の人物の意見や視点を、主要な登場人物ひとりひとりに即して整理し、その全体像を示す。そしてそれらを、社会的・文化的枠組みからとらえなおし、「草の花」がもっている文化的な意味を、男どうしの関係の硬派的な稚児愛文化からの離脱という視点でまとめていきたい。

3. 福永武彦と「草の花」

ここでは、まずはじめに著者の福永武彦の生涯と、作品「草の花」の内容について概略し、つづいて、「草の花」に関する先行研究での指摘を検討する。

3-1 福永武彦の略歴

福永武彦は1918年、現在の福岡県筑紫野市で生まれた。父親の転勤のため幼少期を横浜市、佐世保市、福岡市で暮らしたのち、1926年に東京に転居する。開成中学、第一高等学校を経て、東京帝国大学に入学、1941年に文学部仏文科を卒業した。1945年結核の治療と戦禍のひどくなった東京を避けるため北海道の帯広に移住する。翌年、帯広中学校の英語講師として勤務しつつ、最初の小説である「塔」を発表する。しかしその年の冬に肋膜炎を再発。1947年秋に手術のため上京し清瀬にある東京療養所に入院した。

療養所を退所した翌年の1954年に発表した小説「草の花」で作家としての地位を確立したあと、「死の島」や「廃市」「忘却の河」などの人間心理の深奥をさぐる作品を発表している。1979年に脳出血のため死去。

3-2 「草の花」

「草の花」は、福永の第一高等学校在学時の体験をふまえて書かれた、彼にとっては唯一の私小説的な作品である。彼は、清瀬療養所に入所中、「草の花」の「冬」「第1の手帳」の原型にあたる「慰霊歌」という作品を執筆している。その後、「第2の手帳」および「春」の章を書き加えて「草の花」として完成させた¹⁾。

小説の中心は、結核の手術によって命を落とした主人公の汐見茂思が、語り手である私に残した2冊の手帳である。第1の手帳は、一高在学中の後輩である藤木忍への愛情が描かれている。第2の手帳では、藤木忍の妹である藤木千枝子との恋愛関係が主題となっている。小説の前半では、後輩である少年への同性への愛が、後半では成長した妹との異性間の恋愛という、ふたつの恋愛が対等に扱われるという構成になっている。

この論考では、男どうしの関係に焦点をあてるため、前半の第1の手帳についての概要を説明することとしたい。

1) 「慰霊歌」については、日高・和田（2002）を参照。「草の花」の執筆をめぐるプロセスについては田口（2015）が詳細に述べている。

1930年代半ば、一高弓術部の2年生である汐見茂思は、1年生の藤木忍をひそかに愛していた。伊豆半島の戸田で行われる、弓術部恒例の3月の合宿で、汐見は藤木に愛の告白をするが藤木からは色よい返事はかえってこない。藤木との関係に悩む汐見のことを、同級生や先輩が心配し、いろいろと意見やアドバイスをするが、汐見の気持ちは晴れることはなかった。合宿の休日の夜に、村の祭りに出かけようと乗り込んだ和船が、湾内の風と波のため櫓を失い海上に漂ってしまう。その和船のなかで二人きりになった汐見と藤木との間で、一瞬愛が成就したかのように思われたが、船が無事岸に戻ってからは、以前の藤木の態度に戻ってしまう。母の病気のため、急遽合宿所から船で東京へ帰る藤木を、湾の岬の先端で見送る汐見は、藤木への自分の愛の形を確認する。

合宿の後、寮を出て自宅住まいとなった藤木との関係は途絶えた。そして、その年の夏に静養中の親戚の家で藤木は急死する。

3-3 草の花の評価

福永武彦の小説のなかで最も読まれたものとされる「草の花」については、多くの研究が存在する²⁾。「第1の手帳」における汐見茂思と藤木忍との恋愛関係は、そうした研究においても主要なトピックである。その関係についての代表的な議論としては、首藤基澄による「汐見の藤木忍への愛は特殊である」³⁾、「藤木忍との関係は精神的な愛の試みで、疑似恋愛であった。勿論魂の飛翔体験は真実であったが、いわゆる恋愛ではなかった」⁴⁾というものがある。ここでは、男による男への愛は、異性愛とは異なる特殊なもの、という認識が示されている。首藤はさらに「汐見の愛への投企が精神的なものにとどまらないことを察知した時、それを拒否しなければ、間違いなくホモセクシュアルの世界に入り込むことになる」⁵⁾とも述べている。ここでは、男どうしの関係が、肉体的なものに至ると「ホモセクシュアル」なものとなる、とされている。首藤による「ホモセクシュアル」という概念が、なにをさし示しているのかは判然としないが、少なくとも、異常な性愛としての同性愛といったニュアンスを帯びていることは確かであろう。すなわちここには、異性愛=正

2) 作品全体を通しての汐見の恋愛を、第1の手帳と第2の手帳との関連性を軸として分析した研究は、小佐井(1974)、畑(1982)、細川(1991)、野村(1999)、西田(2005)(2008)、鳥居(2007)、高松(2010)、田口(2015)など多数ある。

3) 首藤(1972) p.9

4) 首藤(1989) p.139

5) 首藤(1989) p.138

常＝正しい恋愛、同性愛＝異常＝疑似恋愛、という図式が存在しているのだ⁶⁾。

同性愛をふくめた、セクシュアリティやジェンダーについての研究の蓄積がまだほとんどない時代における、「草の花」の男どうしの関係に対する認識はこのようなものであった。

それに対して、1990年代以降のジェンダー、セクシュアリティ研究の発展以降の研究では、さすがにそうした同性愛蔑視のような言説はなくなり、むしろ日本の同性愛の文化や社会状況のなかに、「草の花」を位置づけようとする研究があらわれてくる。

吉川豊子による「ホモセクシュアル文学管見」はそうした潮流の一つと言える。そのなかで吉川は「スクール・ボーイの同性愛」の物語系譜として、堀辰雄「燃ゆる頬」と三島由紀夫「仮面の告白」にならべて、福永武彦「草の花」をあげ、明治・大正期の少年たちにとって「男の子同士の同性愛的な感情は、いまよりもずっと普通感覚でとらえられていた」⁷⁾と述べている。

また、小林翔子は「藤木と汐見の関係については、常に同性愛か友情かということが議論されてきた」と指摘したうえで、「結論からいえば。これは『同性愛』ではない」とする。というのは、『『男』同士という点だけを特化して硬派を『同性愛』の範疇におしこめることは、おそらく現代の強制的異性愛セクシュアリティに根ざした安易な解釈に過ぎない」からである、としている⁸⁾。この意見に筆者も賛成するが、小林の次の考えには疑問も持っている。それは、「一九三五年当時、一高に在籍していた福永が来嶋に寄せた「愛」は硬派的なものであり、その経験をもとに描かれた『草の花』「第1の手帳」もおそらくは同列にある」という主張である⁹⁾。

現実の福永の体験はともかく、作品としての「草の花」に描かれた汐見の藤木への思いは、決して硬派的なものではない。このことについては以下の論考で詳しく述べていきたい。

また、小林の論においても、先の首藤と同じように、「同性愛」という用語が自明のものとされている。そのため、汐見と藤木の関係は「同性愛」か「友情」か、という議論の枠組み内での問題提起にとどまっている。小林によれば、「草の花」の汐見の恋愛は「同性愛」でも「友情」でもなく「硬派的なもの」である、とされるが、それは「同性愛」およ

6) 菅野他の共同討議で、ある評者は「草の花」を「ホモ小説」と笑いながら呼んでいる。ここからも同性愛を蔑視する視点を読み取ることができる。菅野他（1980）p.76

7) 吉川（1992）p.98

8) 小林（2007）pp.154-155

9) 小林（2007）p.155。来嶋とは「草の花」の藤木のモデルとなった下級生である。

び「友情」という概念の枠組みを問い直すものとはなっていない。

この論考では、そうした枠組み自体を根本から捉え直すため、そして「同性愛か否か？」というさほど意味のない議論を展開していくことを避けるため、「男どうしの関係」という表現を主として使用していく。なぜならば、その男どうしの関係が「同性愛」であるのか「友情」であるのか、ということ自体が「草の花」の中で登場人物たちの議論の中心となっているからである。さらには、登場人物によって友情とか愛という言葉に込めている意味が微妙にずれているからでもある。

あくまでも、登場人物の語る言葉に即して、それらの概念を使用するために分析のための概念としては「男どうしの関係」という用語で説明していきたい。

4. 汐見茂思と藤木忍の関係

さてそれでは、「草の花」にあらわれている汐見と藤木の関係についてくわしく見ていこう。

4-1 汐見の藤木への愛：愛の理論と感情

まず、汐見の藤木に対する愛の理論から確認していく。藤木に対して汐見は自分の「愛」について次のように語っている。

そうした見える世界から見えない世界にはいつて行く、それが愛なんだよ。愛するということは世界を創り変えてしまうんだ。もし君が愛したら、……いいかい、その時には人間の経験を絶したアイデアの世界に僕等の魂が飛翔して行くんだ、時間もなく、空間もなく、そこには永遠の喜びがあるんだ……。

藤木から「汐見さんの好きなプラトーン……」と返されるように、これはプラトンのな、アイデアの世界への精神の上昇という恋愛観そのものである。肉体を排除した、精神的なつながりへの強烈な希求、そして、具体的な時空間を超越した「永遠」の世界へのあこがれをそこに見ることができよう。こうした汐見のプラトンの恋愛観は、「草の花」の随所で描かれている。

そして、別のところでは、汐見はそれを「魂の錬金術」とも呼んでいる。

美しい魂がある、その魂の認識のしかたがある。（中略）僕は人間の中にあるそういう美しいもの、純粹なものを、一度発見した以上、僕自身の魂、この汚れた魂をも美しくし、また他人をも美しい眼で見て行くことが出来ると思うんです。美しい魂の錬金術、と僕は名づけたんですが、僕自身がこの魂を発見したということから出発して、みんながもっと美しく、もっと幸福に、暮らして行けるようになれると思うんです……。

ここで述べられているのは、単なる恋愛感情というものではなく、他人とのかかわりの中において、相手の中に純粹なもの、美しい物を発見することを喜びとする生き方であり、それをさらに社会にまで広げていこうとする思想である。

それはいわば、「友愛」とでも名づけるべき関係のあり方であり、汐見の愛の理論はそうした広い愛の世界にまで到達しているのである。

いっばう、そうした分析的な愛の理論だけではなく、愛がもたらす感情の高ぶりも汐見は強烈に感じている。

喋っているうちに、歓喜が怒濤のように僕の内部に打ちつけた。僕だけが知っているのだ、無垢の魂に誘われるこの思慕、愛するというこの陶酔、意識の全領域を照し出すこの明智、天使の方へと僕を引き上げるこの飛翔感……。

ここで述べられている歓喜の感情は、感覚におぼれるようなものではなく、「明智」すなわち理性とともにある思慕であり、陶酔であることを、汐見は「physiqueな要素とは絶対に違う」「不純な気持ちなんて全然ない」という表現を用いて語っている。

しかし、こうした汐見の愛を、藤木は受け入れることを拒否する。自分は下らない平凡な人間で、汐見から愛される資格がないこと、そして、自分には母以外に人を愛することはできないこと、がその拒絶の理由である。

したがって、汐見の愛は一方向的なベクトルでしかない。その一方的な愛について、汐見は、

僕は遠くから君を愛している、君はただ君であればいいんだ、僕が苦しもうと苦しむまいと、君には何の責任もないんだ。僕だって苦しまないようにする、君の気持ちに負担を掛けないようにする、ね、だからこの愛を咎めないでくれ、ね、藤木？

と述べて、自己完結する愛として結論づけている。

ここまでの汐見の愛の理論をまとめてみると、「永遠のアイデアの世界をめざす精神的な陶醉をとまなう、自己完結的な相手への思い」ということになるだろう。

4-2 理論と現実との葛藤

ところが、実際にはそうした愛の理論とは違って、現実の汐見はみずからの愛に苦しむことになる。

その原因は、愛にひそんでいる肉体的な要素である。

なによりも、作品中でくりかえされるのは、藤木の顔の美しさであり、それは小説の第2の手帳で、藤木の妹である千枝子の描写での、千枝子は兄ほどの顔の美しさがない、という説明からも読者に強く印象づけられるものとなっている。

そうした美しい顔、という表象のみならず、藤木の肉体そのものへも汐見の心は惹かれていく。

弓を引いている藤木の、片袖を脱いだ襷の白い肩に花片が散りかかるのを見て、美しいと感じ、同時に、何か息苦しさを感じる、という描写は、藤木の肉感的な魅力に惹かれながらも困惑する汐見の姿である。

さらに直截には、藤木とは一緒に風呂に入ることができない、という汐見のはにかみもまた、肉体的なものへの葛藤をあらわしている。

そうした、藤木の美しさや肉体にひきつけられる自分の心の動きを、汐見は、心のなかにひびいてくる「異質的な弦」として感じている。異質的な弦とは、愛の歓喜や陶醉を、調和のとれた「美しい音楽」として感じとるなかで、その調和した音階とは異なる、あつてはならない存在がまぎれこんできたことの具体的な表現である。

たとえばそれは、先輩の春日からの、「それじゃ君の藤木に対する気持ちの中に、やましいものは何にもないわけなんだね？」という問いかけに対する、汐見の内面の動きとして次のように描かれる。

やましいもの、physiqueな要素、……僕の心の奥深いところで、異質的な弦が鳴り渡り、何かが微妙に反撥した。

自分の心の中に潜んでいる、肉体的なものへ惹かれる心のありように、思わずうろたえてしまう汐見の微妙な心理がそこにある。

この様に汐見は、みずからの愛の理論と、現実の藤木の肉体に惹かれる自分と間の矛盾に直面せざるを得ない。

しかしこの矛盾は、最終的には精神による肉体との統一として止揚されてしまう。

夜の湾内で、和船に藤木と二人取り残され、船中で抱擁したときに感じた陶酔感は、「あらゆる感情の楽器が、異質の弦を打消して、tuttiに充まり、鳴り響く」ものとして描かれる。

そして僕の意識の全領域を、あのいつもの眩惑、気の遠くなるような恍惚感が占めた。もう森のことも矢代のことも考えなかった。もう誰もいなかった、藤木と僕と、ただこの二人だけ。僕等を囲んで、天もなく海もなく、場所もなく時間もなかった。風が吹こうと波が荒れようと、この夜は永遠であり。この愛は永遠だった。もう不安もなく絶望もなかった。僕の腕の中のこの肉体を愛しているという、皮膚のびりびりする緊張と、愛されているという嘗て知らなかった異常な感覚、気の遠くなるような飛翔感、藤木を抱いていながら何等やましさを感ぜないこの精神と肉体との統一、ただこの陶酔が永遠にはてしないように……。

ここでは、汐見があつく語っていたプラトンの永遠の精神の飛翔感が達成されている。

しかし残念ながら、それはその一瞬のみで、瞬時に消えさってしまう。船中での体験以降、藤木はふたたび汐見の愛を拒絶する態度をとる。汐見の愛は成就しなかったのである。

汐見はそのことにとまどいを覚えるが、最終的には、藤木を美しいと感じる自分の感覚を、肉体的なものではなく、霊的な要素だと信じるに至る。魂を愛することと、肉体を愛することとの間には何の矛盾もない、という結論に達するのだ。これが、第1の手帳における汐見の愛の理論の最終的な形である。

5. 男どうしの関係をめぐる周囲の思想と価値観

前節で汐見と藤木の間を、汐見の愛に関する認識を中心として確認してきた。この節では、その汐見の愛の認識をめぐって、そして汐見と藤木の間を、汐見の周囲の人びとが、どのように反応し、また、どのような考えを示したのかについて明らかにしていきたい。

「第1の手帳」に出てくる主要な同級生や下級生そして先輩は、それぞれ異なった考えや

立場を持って登場している。以下では、6人の主要な登場人物ひとりひとりに即して、それらの特徴を説明していきたい。

まずは、汐見と藤木の間をめぐって、直接的に影を落とすことになる、藤木と同級生の矢代の存在から見ていこう。

5-1 ライバル関係

矢代

「草の花」では、藤木と同じ1年生の登場人物が何人か出てくる。そのなかで、藤木と最も親しいのが矢代である。

矢代は、学年は汐見の一つ下だが、浪人を一年しており、旧制中学を4年で修了して一高に入学した汐見より、年齢は一つ上ということになる。このことが、矢代と汐見の関係、矢代と藤木の関係にも影響してくる¹⁰⁾。

矢代にとっては、汐見は学年は上だが、年齢的には自分より下ということになる。それが、作品中での矢代の汐見に対する馴れ馴れしげな口ぶりをもたらしていることは間違いない。

そして、矢代と藤木の関係も、単なる同級生という関係ではない。汐見と同じく、中学を4年で修了して一高に入学した藤木は、矢代から見ると同級生だが2歳年下ということになる。このことが、矢代の藤木への恋愛感情を可能とする文化的な基盤を形成している。

のちに詳しく触れることになるが、明治から昭和初期の学生文化、学校文化において、近世に淵源をもつ、年齢階梯制的な「男色」文化すなわち硬派的な文化は、色濃く存在していた。そこにおいては、文字通り年齢の上下にもとづいた、念者と稚児という関係で男どうしの恋愛関係が成立していたのである。念者は愛する主体であり、稚児は愛される客体である。したがって、その文化の影響力の圏内では、年齢の上下は男どうしの関係において決定的な意味をもっていた。

作品のなかでは、矢代が藤木に対して恋愛感情を抱いていたことを明示的に示す描写はない。むしろ、汐見の藤木への思いをかなえさせようと、間に立って積極的に介入してくる矢代の姿がある。

合宿所に来たものの、藤木を避けている汐見に向かって、矢代はなじるように汐見の態度を責める。

10) 大森 (1983) p.25の注 (2) 参照

— 実際、汐見さんは臆病だからなあ。もっとどンドン藤木と話をしたり、一緒に附合ったりしなきゃ駄目だ。遠くでこそそそしてるから、かえって藤木だって気にするんですよ、しょっちゅう汐見さんに監視されてるみたいだと、この前言ってた。

僕は黙って横向になり、今迄凭れていた大きな丸石の表を掌で撫でた。石の表はすべすべしてほんのりと暖かい。

— 本当に臆病だ、と口惜しそうに口を尖らせた。それに藤木の方ももっと臆病なんだから。だいたい僕の経験では、……

— 君の経験なんか聞きたくないよ。

矢代は歯を見せて笑った。笑うと大人びて如何にも狡そうに見える。熱心に言い足した。

— とにかく藤木はまだ子供なんですよ、何にも分からないんだ。

まるで、汐見の恋愛の指南役でもあるかのようにふるまう矢代は、自分は学年は下だが、同性との恋愛経験は汐見より豊富だということを、さりげなく披露する。

つまり、矢代は硬派的な稚児愛文化にどっぷりとつかった人物として描写されているのである。

そうした矢代の存在は、汐見の目には、藤木を争うライバルとしてはっきりと映っている。同級生や先輩たちと峠に向かう道すがら、合宿所に残っている藤木たち一年生たちのことを、汐見は

藤木は今頃、矢代や森や石井などと一緒に、何をしているだろうか。いつでも藤木の側にいて、彼と話したり笑ったり出来る矢代に、僕は胸の痛くなるような嫉妬を覚えた。僕なんか、人目を憚って、たまに藤木と短い会話を交すに過ぎない。それももし藤木が部をやめるようなことがあれば、僕と彼との間を繋ぐ糸はぶつんと切れてしまうだろう。

と、矢代への嫉妬をまじえて想像するのだ。

この矢代への嫉妬は、藤木の死後、妹の千枝子と汐見が付き合う時になってもよみがえってくる。

千枝子の家を訪問してくる矢代のことを彼女から聞いて、

しかし千枝子の口の利きかたが矢代に厳しいのを聞いていると、何かしら心が揺ぎ始めた。矢代、——むかし藤木忍と一番仲良くしていたのは彼だった、彼が藤木と親しげに話を交しているのを見るたびに、僕の心は奇妙に波を打ち始めたものだ。

と学生時代の記憶をよみがえらせる。

矢代本人の口から、藤木への思いを聞くことはなかったのだが、汐見は、矢代と藤木と自分という三角関係を脳裏に思い描いていたことは間違いない。

5-2 同級生からの批判

矢代は、汐見の藤木への愛情を肯定するばかりか、積極的にそれを応援する態度を示していた。しかしながら、汐見の周囲はそうした理解者ばかりがいたわけではない。逆に、汐見の恋愛に対して批判的な意見を述べる同級生たちもいた。それは、柳井と木下の二人である。とはいえ、この両者による汐見の恋愛への批判は、かなり異なったかたちをとっている。次にその両者の汐見への批判を見ていこう。

柳井

汐見に対して、正面から藤木との関係を批判したのは、弓術部のキャプテンの柳井であった。ある晩、先輩と村で酒を飲んで合宿所に帰ってきた柳井は、いままで汐見に対していただいていた感情を爆発させるかのように、汐見を難詰する。

——汐見、と不意に言った。己は汐見にちょっと言いてえことがあるんだ。

柳井が気味の悪いほど充血した眼で僕の方を睨んだ。そうか、そのために酔って来たのか、と僕は思った。柳井は不断はひどく気が弱かったから。

——何だ？ と僕は訊いた。

——己は、己は、と吃って、柳井は大きな息を吐いた。それから少ししゃんとなって急込みながら喋り始めた。……己は汐見の料簡がよく分らねえんだ。

(中略)

——己はな、己にしたって言いにくいけど、汐見、お前が藤木のことなんかでよくよしてるのがたまらねえんだ。

——君は分らないから、……

——分る、分るとも、己たちはみんな分っている、なあ？ 汐見が苦しんでいるの

はよく分る。しかしそんな苦しみはつまらねえって言うんだ。

僕は自分の頬から血の気の引いて行くのを感じた。

柳井は、キャプテンという立場もあって、例年にくらべて人数の少ない自分たちの学年をひっぱっていかなくてはならないという責任感を強く感じている。そうした柳井から見ると、恋愛で悩み、弓に集中できていない汐見のことが気がかりで仕方がない。

お前一人がそう消耗してれば、己たちだって心持がよくなかろうじゃねえか。藤木なんかくそくらえだ。己たちに大事なものは、汐見、お前だよ。

柳井は汐見を悩みから救いだすために、藤木に弓術部をやめてもらうことまで同級生たちと相談したりしているのだ。

そうした、柳井の同級生集団への強いこだわりが、汐見の恋愛への厳しい批判となってあらわれている。

木下

いっぽう、同級生の木下も、「藤木のことなんぞで君が苦しむのは愚だと思っよ」と、汐見の恋愛に対してははっきりと否定的な意見を述べる。

ただし、木下が汐見の恋愛を批判するのは、柳井のように同学年集団の結束を乱すからではない。先ほどの柳井の詰問のあと、木下と汐見のやりとりはこのように続く。

—（中略）それは友情とは違うんだらうからね。

— 違うない、と僕は強く言った。

— しかし友情というものは相互的なものだよ、柳井が落第しかけたら君が心配する、藤木のことでも柳井が心配する。それが友情だらう、君のは……一人で盲滅法に駈けてるようなものだ。

— そうじゃない、と僕は熱して叫んだ。本当の友情というのは、相手の魂が深い谷底の泉のように、その人間の内部で眠っている、その泉を見つけ出してやることだ、それを汲み取ることだ。それは普通に、理解するという言葉の表すものとはまったく別の、もっと神秘的な、魂の共鳴のようなものだ。僕は藤木にそれを求めているんだ、それが本当の友情だと思っんだ。

—なるほど、それが汐見茂思のプラトンの瞑想の産物だね、と服部がからかうように言った。そりゃ藤木は可愛い少年だよ、ギリシャ語の ephebos っていうのはああいふんだろう。しかし魂なんてのは大袈裟だ。

—だから君たちには分らないって言うんだ。

—僕も魂なんか持ち出すことはないと思うね、と木下がおだやかに言った。好きだというのは physique な要素だからね。

—違う、絶対にそうじゃない、と僕は叫んだ。

木下は、友情の本質として相互性をあげ、汐見と藤木との間ではそれが成立していないことを指摘する。この木下の友情に関する常識的な理解に対して、汐見は、服部にからかわられるような、プラトンのな解釈を持ち出す。

ここで、注意する必要があるのは、汐見の語る「友情」は「愛」と置きかえることができる、という点である。先に汐見の藤木への愛の認識のところで説明した、「魂の錬金術」としての愛の説明と、ここでの本当の友情のあり方の説明の内容はほぼ同じである。汐見にとっては、友情という言葉と、愛という言葉との間に決定的な断絶はない。

それに対して、木下は「好き」(=愛)というのは肉体的な要素を含むものであって、友情とは違うものだとする、きわめて常識的な立場から汐見の考えを批判する。汐見の藤木への思いは、友情としての相互性を欠いた一方的なものであり、かつ、魂といった高尚なものというよりは、「可愛い」少年への恋愛感情だ、と木下は見ている。しかも、その恋愛という感情には肉体的なものも付随している。

こうした木下の認識を前にして、汐見は自らの愛の理論と現実の藤木への思いとの矛盾に直面し、思わず声をあげてしまうのである。

柳井のような、同学年集団至上主義の立場からの批判と、木下のような、友情の本質および友情と愛情の区別に関する、しごく常識的な理解の立場からという、ふたつの方向からの批判にさらされた汐見は、自分の愛や友情の理論によって相手を納得させることができず、周囲からの孤立をいっそう深くしていくのである。

5-3 同級生による理解

柳井や木下のような、汐見への正面からの批判は、しかし汐見の周囲では決して多数ではなかった。むしろ、汐見の藤木への思いを肯定的にとらえる学生の方が多かったのだ

る。その代表は先ほどライバルとして説明した下級生の矢代であるが、ここでは矢代以外の同級生による、汐見への共感と理解のあり方について述べていきたい。

服部

同級生のなかで、汐見の恋愛感情にもっとも同情的なのは服部である。ただし、服部の立場は、矢代のような全面的な汐見への共感ではなく、どこかさめた視点から汐見の気持ちや行動を、時にはからかいの対象として見ている、といったものである。

先にあげた、木下と汐見の友情をめぐる緊迫したやりとりの最中に、横から口をはさんだ発言に見られるように、服部は藤木を「可愛い少年」とはっきり認めるいっぽうで、汐見のプラトンの魂の理論については冷笑的な態度をとっている。とはいえ、汐見の恋愛に対して、木下のように突きはなしてしまうのではなく、暖かく見守る立場をとっている。

湾内で遭難しかけた汐見と藤木が無事砂浜に戻ってきたあと、仲間たちにその非常事態の様子を興奮気味に語りながら歩いている汐見に対して、「でも君は何だか嬉しそうにしてるじゃないか」と「冷やかすように」服部が語りかけるところからも、ほかの同級生たちとは違って、汐見の藤木への思いを注意深く観察し見守っている、服部の汐見に対する共感的な姿が浮かび上がってくる。

立花

服部のような間接的ではあるが明示的な共感とは違う、別の形での汐見への共感を示し続けるのが、もう一人の同級生の立花である。

汐見本人にとっても、立花は同級生たちのなかで、もっとも気がおけない、心を許す友人である。立花は、柳井や木下、服部のように汐見の恋愛について自分の考えを口にすることはない。しかし、彼はさりげない行動や発言によって、汐見への友情と共感をあらわしている。

酒に酔った柳井が口火を切り、その後を木下がひきついだ、汐見と藤木の間をめぐり議論の一番最後に、それまで汐見の隣の寝床で眠っていた筈の立花の、「遅いんだからもう寝ろよ」という声でその場の幕引きがはかられる。そしてその直後、

立花が立って電燈をぱちんと消した。

——汐見だって考えているさ、と立花が立ったまま言った。人の傷口をそうつつくもんじゃない。

と、木下や柳井をたしなめるのだ。

そうした立花の汐見への寄り添いは、合宿所を急に離れることになった藤木を、早朝一人で見送ろうとする汐見に対する、声掛けとなってあらわれてくる。

僕は時計を見て起き上った。急いで服を着始めた。蒲団を二つ折にし、帽子を手づかみにして部屋の襖を開いた時に、寝ているとばかり思っていた立花が、不意に声を掛けた。

— 汐見、マントを忘れるなよ、濡れるぜ。

僕は黙って壁に懸ったマントを取ると、背中に三人の重たい視線を感じながら部屋を出て行った。立花が余計なことを言うものだから、柳井と木下にまで、僕が藤木を見送りに行くのが分ってしまった。立花のいつもの親切がかえって一種の腹立たしさになって、目的地に着くまで僕の心を重く重く覆っていた。

汐見は、立花の思いやりをありがたく思いながら、時にはそれをうとましく感じている。なにも言わず黙って汐見の藤木への振る舞いを見ている立花の視線を、「立花はきっと僕のことを憐れんでいるだろう」と思ったり、「立花に例の皮肉な眼で見詰められるのはかなわない」とおびえたりもするのだ。

しかし、小説の後半、第2の手帳の末尾近く汐見の出征の場面で、駅のプラットホームにただ一人見送りに来てくれたのは将校となっていた立花だった。

それは昔、いつも黙って僕を見守り、直接にそれと感ぜられないような、実のある友情を注いでくれた男だ。

とあるように、汐見にとっては、同級生のなかでも一番の信頼をおき、友情を交わした存在であり、藤木への思いも、共感とまではいかずとも、それを許容し、深く理解してくれているのが立花であったといえよう。

5-4 友情の理論・愛情の理論

春日

ここまで、同級生たちの、汐見の恋愛への批判や共感について述べてきた。

しかし、汐見の愛や友情に対する考え方に、深いところで共鳴する同級生や下級生は存

在せず、汐見は、自分は誰にも分ってもらえないという思いを強くしていく。

そんななか、唯一の汐見の思想の理解者としてあらわれるのが、大学生となっている先輩の春日である。

山道を歩きながらの二人の会話では、自分は孤独だという汐見に対して、春日は「君が孤独だというのは分るよ」と理解を示す。そして、汐見の孤独は、藤木への愛がかなえられないからだ、ということも春日は知っていると告げる。

そのうえで、春日は、汐見の藤木への愛を次のように説明する。

— 君はいま夢中になっているから分らないだろうけれどね、そういう時期は誰でも一度は経験するのだ。つまり麻疹のようなものと僕は思うよ。一体、子供の時代には人間は asexual だ、少し大きくなると bisexual になる、つまり男女両性的なんだね、そのあとに homosexual な時期が来る。そうして大人になるんだ。だから君の今の状態は過渡的なもので、いずれは麻疹のように癒ってしまうさ。

つまり、思春期から大人へと成長する過程における、性の発達的一段階として、同性への愛を経験する時期が存在する、という発達段階論の立場からの説明である。

春日は医学部の学生であるので、1920年代から30年代にかけて、氾濫のように日本社会に流れ込んできた、「性」についての西洋の性科学の言説に、専門家として精通していても不思議ではない。その春日が、当時の一般社会では主流であった「変態性欲としての同性愛」という図式ではなく、フロイトの性理論に代表される、正常な性の発達段階における一段階としての同性愛、という理論を持ち出してきたことに注目しておきたい。

そうした、科学的な性愛の理解とは異なる、もう一つの恋愛に関する春日の理論がある。それは、同性どうしの関係における abnormal、すなわち異常さについての考え方である。

春日は、homosexual なものどうしが、共通の孤独を求め、周囲との間に秘密の壁をつくることがある。その壁のあるなしで abnormal か否かが決まる、という。壁の外側の「健全」な社会へ出て行こうとしない、秘密の壁のなかでの二人きりの関係は異常な関係とされるのだ。

いっぽう、友情というものはそうした「壁」を持たない。そして、同胞愛、隣人愛として二人の関係の外側へ、無限に広がることができる。そうした意味で、友情というものは本来的に正常なものとされる。

先に汐見の恋愛観について説明した箇所で、春日の汐見への問いかけとそれへの汐見の

回答について触れてきた。そこでの、藤木との関係で「やましいもの」はないのか、という問いこそが、春日における normal と abnormal とを区別する、重要な基準だったのである。汐見が、その問いに対して、やましいものはない、と答えつつも、自らの内部にある、藤木の肉体的なものへ惹かれる気持ち、physique なものを求める気持ちにうろたえているのは、先に示した通りである。

汐見にとっては、その physique なものをめぐる秘密の壁の問題を解決できれば、春日のいう、abnormal ではない男どうしの関係、すなわち友情であるとともに、それだけにはとどまらず、そこから同胞愛、隣人愛へと、発展していくものへすすむことが可能となる。そしてそれは、汐見の考える「プラトンの愛」「愛の錬金術」というあり方と、さほどへだたったものではない。

ここに、汐見の愛の理論の唯一の理解者としての春日の姿がはっきりと示される。

そして、春日は単なる理論的な理解者であるにとどまらず、恋愛のもたらす孤独、そして孤独の中で傷ついている自分、という汐見の語る悩みについても共感する存在であった。

藤木との関係での悩みを打ち明けた汐見が、「春日さんはそういうことはないんですか」と尋ねたことへ、春日は、「僕？僕だって傷ついているよ、そう見えないかい？」と返答している。

つまり、春日は汐見の苦しみを理解すると同時に、自分の過去の苦しみの体験と重ね合わせて、目の前の汐見に共感する存在でもあるのだ。

5-5 汐見の愛をめぐるさまざまな立場

ここまで汐見の周囲の6人の登場人物の思考について詳しく論じてきた。そこからは、汐見の愛をめぐる、弓術部の部員たちがさまざまな認識をもち、それに対応した多様な接し方をしていたことがわかるだろう。

ここであらためて、それらの考え方の全体像を整理してみたい。

まず、汐見の恋愛のあり方へ批判的な態度をとっているのは、同級生の柳井と木下である。柳井は、同学年集団の結束の乱れを心配し、木下は男どうしの友情を超えた関係そのものを否定する立場に立つ。

それに対して汐見の恋愛に積極的に同調し擁護しているのは下級生の矢代である。また、矢代よりは距離を取った共感を示すのは同級生の服部である。両者は、いずれも近代日本の学校文化における硬派的稚児愛の文脈で、汐見の恋愛感情や行動を意味づけているといえる。

同級生の立花は、恋愛そのものへ是非は示さず、ある一定の距離を取っているが、同級生としての汐見に対して、その心情を深く理解し、暖かい眼で見守っている。

先輩の春日は、汐見の恋愛・友情観に対する唯一の理解者であり、共感者である。

これが、「草の花」における、男どうしの関係・恋愛をめぐる、さまざまな認識の全体像ということになる。

この全体像の特徴を2つ指摘しておこう。

まずはひとつめの特徴として、汐見への批判ではなく、許容あるいは理解、共感する人間のほうが多い、という点が指摘できる。

しかも、汐見の恋愛への批判について、その内容を丁寧に見ていくと、柳井の批判は、男どうしの恋愛に対する全否定ではないことがわかる。というのは、柳井は、汐見が藤木のことを好きに思っていることを批判しているのではない。藤木への思いに強くとらわれるあまり、必要以上に思い悩んでしまっている汐見の態度について批難しているのである¹¹⁾。

木下の批判は、柳井とは違って、汐見の心情そのものへの批判であり、「好き」という思いには肉体的な要素が含まれていることを指摘している。こちらは、男どうしの関係において、肉体的な要素を排除した「友情」は存在するが、肉体的要素を含む「恋愛」は友情とは異なるもので「変態性欲」的なものである、という社会一般の常識と共通するものだと見える。しかし、そうした意見をはっきりと述べるのは木下だけであり、一高生（少なくとも汐見の周囲の一高弓術部員）のなかでは、例外的なものとなっている。

全体としての肯定的なとらえ方、という特徴に加えて、肯定、否定の両面それぞれにおいて、視点が多様であることを、もう一つの特徴としてあげることができる。

否定的に見る柳井と木下の視点の違いについては先に述べた通りである。

彼らとは逆に汐見の恋愛を肯定的にとらえる見方も、単一の視点というわけではない。

矢代や服部のように、年下の美少年への恋愛を、いわば自明のものとして見る立場があるいっぽうで、立花のように、友人としてそうした汐見の心情を許容する立場もある。そして、春日の性愛についての一般的な理論からの把握、それとともに、男どうしの関係における正常と異常をわける、春日個人に特有の考え方という側面もある。

それらの多様な視点を、ひとりひとりの登場人物の描写やさまざまなエピソードと組み合わせ、汐見の周囲に配置しているのが、「草の花」の「第1の手帳」の世界だということこ

11) 「草の花」の前作である「慰霊歌」のなかで、柳井は「藤木が好きなら好きでもいいさ」と述べて、汐見の恋愛をはっきりと肯定している。そしてその言葉にひきつづいて「しかし駄目になったら諦めろ」と汐見に忠告しているのだ。

とができよう。そうした、外部からのさまざまな視線にさらされることによって、春日以外には理解されることのない内面をかかえた汐見の苦悩が、よりいっそうはっきりとした輪郭をもって浮かび上がってくる。

6. 男どうしの関係をめぐる価値観

さて、そうした汐見の苦悩の背後にある、男どうしの関係をめぐる社会的・文化的な認識枠組みを、直接的な汐見への肯定・否定という視点から離れて、性についてのより広い文脈から把握してみたい。

6-1 異性愛文化と男どうしの関係

ここまでの分析では、男どうしの関係に焦点をあてて多様な視点を確認してきた。それでは、男どうし以外の関係、具体的には異性愛的な関係や視点は「草の花」の第1の手帳ではどのように描かれているであろうか。

第1の手帳で描かれる弓術部の合宿風景には、女性の存在はほとんど感じられない。女性を対象とする異性愛の具体的な話題もまったくあらわれてこない。しかし、直接の登場人物としてではなくとも、東京での高校生としての生活のなかに女性の姿が、まったく不在だとは考えにくい。戦時体制が徐々に進みつつあるとはいっても、非常時の男女交際は不謹慎だ、という緊迫した社会状況ではなかった¹²⁾。そうした社会状況のなかで、伊豆半島の人気のない村での合宿というのは、男どうしの関係を描くには格好の舞台だったといえよう。

そんな合宿の男性集団の世界のなかに、ほんのかすかにだが女性の存在、さらには異性愛を想起させる描写がある。

藤木と同学年の1年生のなかで、矢代とは違う性格づけがされている人物に森と石井の二人がいる。この二人は、汐見の藤木への思いを知りつつも、それに対して皮肉なまなざしを向ける存在として描かれる。さらに、合宿所の暗い空部屋のなかで、ドイツ語の性の実用書のようなものを手にしながら、性交の体位を二人で試みに実践している場面は、それをたまたま目撃した汐見に強い衝撃と嫌悪感をもたらす。その森と石井は、矢代や汐見

12) たとえば1932年5月には、慶応大学の学生と女学生の心中事件（坂田山心中）が世間の話題をさらった。この事件を題材につくられた『天国に結ぶ恋』という映画は大ヒットする。学生と女学生の恋愛は、日常にあふれている時代であった。

のような少年への愛にはまったく興味をもっていない。汐見の同級生の木下もあわせて、いわば異性愛主義者であるといえよう。

その森が、湾内で和船を漕ぐ練習を終えたあと、教師役の木下との間にかわした会話は次のようなものである。

— 日村の合宿も悪くないが、どうも女気がなさすぎますね。

— 生意気言いやがる。寮と同じじゃないか。

— 寮なら表へ出て行きさえすればね。此所は村まで行っただって、ろくなメツチェン一人いないんだから。

— 当たり前だ。そう言えば藤木は女性的な感じがするね、男ばかり見ているせいかしらん。

— あれは子供なんですよ、まだおっぱいの匂がしている。けれど不思議だな、どうしてああ頭ばっかし発達しちゃったのかな。

— 森はどうだい、色気の方ばっかしか？

そして二人の笑い声が砂の上から遠ざかって行った。

このやりとりからわかるように、森と木下は、色気＝異性愛文化にどっぷりとつかっている。彼らの性的な関心は女性にしかない。

そして、ここで注目したいのは、そうした異性愛主義者である木下の目には、藤木は女性性を帯びているように見えていることである。

これは、汐見が藤木に惹かれている心情を、異性愛者の視点から読みかえている視点だと言えよう。しかし、それはあくまで異性愛主義的な「読みかえ」に過ぎない。たしかに汐見も藤木の「美しさ」に惹かれる自分を自覚しているが、そこには藤木を「女性的」だととらえる意識はまったくない。あくまでも、藤木は美しい「少年」なのであり、ジェンダーを女性として読みかえるような手続きをとることはないのである。

汐見や矢代に代表される、年下の少年に対する恋愛という男どうしの関係と、森や木下たちのような異性愛主義的な視点との接点はどこにあるが、それは一瞬交錯するものの、すぐさま別な方向へと別れて行ってしまうような関係性にすぎない¹³⁾。

13) もうひとつの別の異性愛主義は大学生の春日の性的発達段階説に見ることができる。「草の花」の第1の手帳から第2の手帳への移行は、春日の説をなぞったものだ、という首藤（1972）の指摘は一考に値する。しかし、汐見の視点からは、第2の手帳の恋愛対象の女性である千枝子は、兄の忍ほど美しくない存在として描かれている。

6-2 硬派的稚児愛文化

汐見の周囲をとりまく。男どうしへのまなごしの中でもっとも影響力をもっていたのは、世間一般とは異なり、森や木下のような異性愛中心主義の視点ではない。

それは、矢代や服部に代表される、硬派的文化に埋め込まれた「稚児愛」「美少年愛」主義の視点である。

ここでいう硬派とは、明治以降の男性による書生・学生世界において、年下の少年への愛を核とする文化のあり方である。それは、軟派と呼ばれる性的な興味関心を女性にむける学生たちの傾向に対して、きわめて鋭い対立を示している。

この硬派的な文化には、単に美少年を愛するというだけでなく、暴力的なふるまいも含めて、精神や行動における男らしさの称揚や、男どうしのつながりへの過度な思い入れが付随している。硬派は、女性好きな軟派を、「懦弱」だと軽蔑し、自分たち硬派男性の粗暴さや、集団での精神的な高揚、昂奮状態を賛美する。つまり硬派は、男らしさの強調と、女性的なるものの排除ということ、その本質としているのである。

稚児愛・少年愛の背後にある社会的な構造の特徴のひとつは、そうした女性性の排除による男性集団の結束にあるが、もうひとつの側面は厳格な年齢階梯制およびそれにもとづく念者-稚児関係にある。

武士の世界において、元服を境とする、未成人と成人との区別は決定的な意味を持っている。

その武士の世界における男どうしの恋愛は、成人である念者から未成人である稚児への思い、という形式をとる。成人どうし、未成人どうしの恋愛は、「男色」という文化においては存在しない。その文化においては、恋愛の主体である年長の念者と、恋愛の客体である年少の稚児、という年齢階梯に沿った形での関係以外は認められないのである。逆にいえば、そうした形にのっとった恋愛は、社会的に許容され、時には賞賛の対象となることもあった¹⁴⁾。そうした意味で、硬派の文化と男性の年齢階梯制というのは切っても切り離せない関係にある。

こうした硬派の文化は、前近代においては武士階級のなかに脈々と流れていた。とりわけ、薩摩はそうした少年愛・稚児愛や女性蔑視の文化を最も色濃く保っており、しかも、

汐見にとっては、男性である忍への愛の方が、女性である千枝子への愛よりも、純粋で理想的なものとしてとらえられており、春日のいうような発達段階説とは異なった関係となっていることが重要である。

14) 17世紀後半に刊行された、井原西鶴『男色大鑑』の前半は、そうした武士どうしの男色、すなわち稚児愛のさまざまな実話を扱っている。ちなみに後半は、歌舞伎役者を典型とする transgender 的な人物をめぐる物語となっている。そこでは、武士の世界のような年齢階梯制は見られない。

それをたいへん強く誇りに思っていたのである。

明治時代になると、政権の中枢をになった薩摩人のもたらした硬派の文化が、とくに書生・学生の間で流行していく。数的な面でいえば、そうした硬派の書生・学生が大多数になったというわけではない。社会全体の一般的な傾向とおなじように、やはり軟派の書生・学生の方が多かった。しかし、書生・学生世界の価値観においては、軟派ではなく硬派こそが学生たるものの本分である、という考え方が主流であった。その価値観は、選ばれた特権階級としての学生という同質性をもった集団アイデンティティへの誇りと、世間とは一線を画した自分たち学生文化の独自性・高踏性を保持しようという心情によって支えられていた。

このような硬派の文化の伝統をふまえると、矢代や服部はいうまでもなく、表面的には汐見の恋愛を批判している柳井の立場もまた、硬派の世界観に属するものだけということができよう。柳井が主張するのは、稚児愛という要素よりも年齢階梯制による同学年集団という要素を重視しよう、ということなのである。

6-3 汐見のプラトニックな友愛観

矢代や服部、さらには柳井のような硬派的な世界観をもつ人間の視点からは、汐見の藤木への思いは、「稚児愛」「美少年愛」として理解される。

しかし、そうした硬派的な世界や価値観に対して、汐見は必ずしも同調しているわけではない。むしろ、そうした文化に対しては否定的な立場にたっている。それは、1年生の登場人物として一度だけ登場する木村に対する汐見の評価に端的にあらわれている。夕食前の散歩に一人で出かけた汐見は、木村と彼につれられた1年生たちと出くわす、

桜の樹の下で考えていると、寮歌の声が近づいて一年生が三人ほどぶらぶら歩いて来た。先頭にいるのは木村とあって、何年も浪人をしてからはいつて来たのだからもう豪傑気取だ。ステッキで桜の枝を叩きながら、センチメンタルな節廻しで寮歌をがなっている。あとの二人は驢馬のように満足し切った表情で、うしろにくっついていく。

——一緒に散歩しませんか、と木村が言った。

僕は反射的に歩き出した。真直に、人のいない弓場を通り抜け、防波堤にぶつかる。下駄ばきのままその上に這いあがった。僕は君たちのように幸福じゃないんだ、と思った。そんな幸福なんか欲しくないんだ。

この木村たちの集団は、学年こそ同学年であるが、実際の年齢としては年長の木村と年少の1年生という組み合わせになっている。そして、豪傑気取りでステッキを振りまわし、寮歌をがなり立てるといふ、まさに硬派的な文化の典型的な振る舞いが描かれている。

そうした、硬派的な世界への誘いを、汐見は明確に拒絶する。彼は、そうした木村たちの、学生の世界に長年続いてきた硬派的な伝統に疑うことなく身をまかせているあり方に対して、ある種の嫌悪感すら感じている。それは、木村たちの様子を「獣じみた」ととらえる汐見の感覚から、明瞭にみてとることができる。

汐見は、自らの藤木への恋愛感情を、従来の稚児愛・美少年愛という伝統的な文脈に位置づけることを拒否しているのだ¹⁵⁾。

それでは、汐見がつくりあげようとしてる、藤木との関係は、どのような社会的・文化的特徴をもったものだと理解すればよいのであろうか。

それを考える糸口は、汐見の語りにおける、「友情」と「愛」の使われ方にある。

汐見は、藤木への思いを説明するにあたって、時には「本当の友情」と言い、また時には「愛」と語っている。同級生や先輩の春日との会話では「友情」を使い、藤木本人との会話や自己の内的な思考においては「愛」を使用している。とはいえ、春日との対話では、最初は「友情」で始まったものが、後半では「愛」へと変わっていることからわかるように、その使い分けは厳格にされているわけではなく、相互に互換的な概念として使われている。

これは、木下的な「友情」と「愛」を別個のものとしてとらえる見方とは正反対の考え方である。そうした、「友情」と「愛」に区別をもうけない汐見の発想は、「愛」のなかから physique な要素を取り除くことによって可能となった¹⁶⁾。つまり、恋愛をプラトニックに「魂」の問題、精神的なものへと限定して把握する立場に立てば、友情と愛との間に決定的な断絶をもうける必要はなくなるのだ¹⁷⁾。

それが、汐見における〈プラトニックな友愛〉とでも呼ぶことのできる愛の形である。

この汐見のプラトニックな友愛という思想は、硬派的稚児愛文化とはまったく異なるものである。硬派的文化の中において、友情とは同じ立場の男性どうしの間、典型的には同年齢集団の間、において成立する男どうしの関係である。いっぽう、愛は、年齢の上位の

15) また先に確認してきたように、異性愛的な読みかえによって解釈することも拒絶している。

16) この点については、春日の「正常な」男どうしの関係と、「abnormal」な男どうしの関係との区別に対応している。

17) むしろ汐見の思想においては「ふつうの友情」と「本当の友情」との間の質的な違いの方が重要となる。

ものと下位のものとの間で成り立つ関係である。硬派的文化においては、友情の純粋な形がそのまま愛になることはない。友情はあくまでも友情であり、愛はあくまで愛なのである。そこでは年齢階梯による、男どうしの関係の質的な違いが前提とされている。

それに対して、汐見の友情＝愛の理論は、年齢による男どうしの関係の違いを前提とはしていない。

彼が前提とするのは、「魂」と「魂」の対等な関係であって、そこには現実世界での年齢や社会的地位という属性は本質的なものとしては登場しない。

たしかに汐見と藤木の関係は、一見、硬派的稚児愛と同じように年齢の上下関係をもとにしているように見える。

しかし、硬派的な念者－稚児関係と決定的に違うのは、汐見がみずからの愛についての思想を藤木に理解してもらおうと説得している点からも見てとることができる。硬派的な稚児愛では、そうした愛の理論についての説得などは不要であり、存在しない。なぜなら、その関係は文化的制度的に規定されており、その決められたコードに従うかぎり、自分たちの心情の根拠を問い直したり、相手を説得したりすることは必要ないからである。

そして、もちろん、汐見のプラトンのな友愛の理論では、両者の魂には本来的な区別や上下関係はなく、愛のなかで一つに合体するものとされる。ここには、硬派的念者－稚児関係における、愛する側と愛される側の固定された関係、というものは見られない。

このように、汐見は、「対等な個人と個人としての男どうしの関係」を構築することによって、硬派的な稚児愛を乗り越える、新しい男どうしの関係を提示することができた。そして、それは同時に、硬派的な稚児愛として汐見を理解しようとする、周囲の友人たちからの疎外をもたらすことともなったのである。

7. 少年愛小説の系譜と「草の花」

ここまで、「草の花」のなかで展開された汐見の愛の理論の文化的・社会的背景を考察してきた。

最後に、近代日本社会の性の表象や文化における「草の花」の意味を、少年愛小説の系譜のなかで考えてみたい。

日本の近代文学を見ていくと、男子学生間の恋愛を部分的にあるいは全面的に主題とする小説の系譜を指摘することができる。

代表的な作品を、作中で描かれた時代の順にならべてみると、

森鷗外「キタ・セクスアリス」(1870年代)

坪内逍遙「当世書生気質」(1880年代)

木下杢太郎「船室の夜」(1900年代)

折口信夫「口ぶえ」(1900年代)

犬養健「雲」(1910年代)

川端康成「少年」(1910年代)

丹羽文雄「青草」(1920年代)

堀辰雄「燃ゆる頬」(1920年代)

といった作品の系列をあげることができる。

1930年代を描いた「草の花」はこうした作品群の掉尾をかざる小説ということができる。

しかし、そのことを簡単に「スクールボーイの同性愛の物語系譜」¹⁸⁾として把握するのは正確ではないだろう。

というのは、先ほど詳しく論じたように、この少年愛小説系譜において「草の花」はそれまでの作品とは明らかに異なる特徴をもっているからである。

「草の花」以前の作品においては、明治初期の「キタ・セクスアリス」や「当世書生気質」、あるいは明治後期の「船室の夜」のように、年長者が暴力的に年少者を襲うような乱暴なものから、明治後期から昭和にかけての「口ぶえ」「雲」「燃ゆる頬」のように、年長者から弱々しげな愛の告白が見られるものまで、そこでの登場人物の関係性の違いはあるにせよ、年長者=念者、年少者=稚児、という恋愛の構造は維持されている。

それに対して、「草の花」は、そうした念者-稚児関係とは異なる、対等な個人どうしによる男どうしの関係の希求が主題であった。それまでの前近代的な文化の影響から脱した、新しい関係性の模索が試みられていたのである。たとえその関係が汐見の側の一方面的な思いであったとしても。

そして、先にあげた小説では、主人公は稚児の側であることがほとんどであったのに対して、「草の花」は愛する側である汐見を主人公としている点も大きな違いである。稚児すなわち愛される側の苦悩は、多くの作品の中心的主題として表現されるが、愛する側の内面が深くほりさげられることは少なかった。「草の花」では、愛する側の汐見の愛の苦悩が中心であると同時に、愛される藤木の内面や苦悩も同じように表現される。そうした意味

18) 吉川 (1992)

でも、男どうしの関係を対等なものとしてとらえる視点は一貫しているといえる。

さらに、「草の花」では、いままでの作品ではほとんど表現されてこなかった、男どうしの愛をめぐるさまざまな言説や態度の微妙な違いが、登場人物ひとりひとりに即して、丁寧に描かれている。

それは、「草の花」が、「男どうしの関係」とは一体どのようにして可能なのか、という根本的な問いを作品の主題として設定していることに由来している。男どうしの関係に対する汐見の主張やその愛の対象とされた藤木の側の意識、汐見の内面における愛の理論と現実とのギャップからくる悩み、周囲の人間のそうした関係性への多様な認識や距離の取り方、こういった複雑にからみあった糸を、作者は繊細にときほぐしていく。

そうした、男どうしの関係をめぐる多様な視点やあり方をバランスよく配置したという意味で、そして、それまでの硬派的稚児愛を超えた関係を示したという意味において、「草の花」は、明治から昭和初期にかけての少年愛小説の集大成たる作品と位置づけることができるであろう。

8. おわりに

「草の花」の「第1の手帳」における男どうしの関係をめぐるさまざまな思考を詳しくたどってきた。しかし今回の論考で議論することができなかった内容が、いくつか課題として残されている。

まず一つめの課題は、「第2の手帳」との関係である。それは、表現を変えれば、「草の花」における異性愛と同性愛の関係を分析するという課題である。この論考では、「第1の手帳」にあらわれる異性愛の描写については扱うことができたが、「第2の手帳」という、千枝子との異性愛関係を描いた小説の後半部分との関連性まで立ち入って議論することができなかった。

もうひとつの課題は、今回とりあつかった戦前の日本から、戦後の日本における少年愛小説の系譜をたどる試みである。とりわけ、「草の花」が、前近代からの硬派的稚児愛とは異なる、新たな男どうしの関係を切りひらいたとすれば、それが、それ以降どのように受け継がれていったのかをたどることが重要な課題として残されていることを指摘しておきたい。

参考文献

- 大森郁之助（1983）「福永武彦『草の花』年立考」『札幌大学女子短期大学部紀要』1号、pp.23-28
- 菅野昭正・首藤基澄・柘植光彦・中島国彦（1980）「草の花 共同討議 福永武彦の作品を読む」『國文學』第25巻第9号、pp.75-81
- 小佐井伸二（1974）「福永武彦における恋愛 — 『草の花』と『海市』のひとつの読み方—」『国文学 解釈と鑑賞』昭和49年2月号、pp.62-65
- 小林翔子（2007）「福永武彦『草の花』論 — 「記憶」のなかの死者の「生命」—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第29号、pp.152-162
- 首藤基澄（1972）「福永武彦論 — 『草の花』の意味—」『国語国文学研究』第7号、pp.7-17
- 首藤基澄（1989）「『草の花』〈福永武彦〉」『国文学 解釈と鑑賞』6月号、pp.137-140
- 高松麻美（2010）「福永武彦『草の花』論 — 愛の不可能性と魂の救済—」『筑紫語文』第19号、pp.22-39
- 田口耕平（2015）『『草の花』の成立 福永武彦の履歴』翰林書房
- 鳥居真知子（2003）「『草の花』にみる〈孤独〉」『福永武彦研究』第7号、pp.2-14
- 西田一豊（2005）「作為された孤独 — 福永武彦『草の花』論」千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第120集『日本近代文学と宗教』、pp.54-64
- 西田一豊（2008）「マチネ・ポエティックと『草の花』」『千葉大学人文研究』第37号、pp.149-167
- 野村智之（1999）「福永武彦『草の花』論 — 「第二の手帳」に於ける精神世界の終りを中心に—」『日本文藝研究』第51巻第3号、pp.117-129
- 畑 有三（1982）「『草の花』の誕生」『国文学 解釈と鑑賞』第47巻第10号、pp.72-78
- 日高昭二・和田能卓（2002）『未公刊著作集19 福永武彦』白地社
- 福永武彦（1972）『草の花』新潮社
- 細川正義（1991）「福永武彦『草の花』論」『日本文藝研究』第43巻第1号、pp.14-30
- 吉川豊子（1992）「ホモセクシュアル文学管見」『日本文学』第41巻第11号、pp.93-103

—2021.2.8受稿—